

□ 書評 □

史野根生(編) 「膝のスポーツ傷害」

石井 清一
(札幌医科大学整形外科)

この8月の夏休みを利用して、「膝のスポーツ傷害」を読ませていただいた。史野根生氏が編集して、史野氏を含めた7名の分担執筆による著書である。実は、史野根生氏の長兄は、私とは医学部の同級生である。昭和34年、5年の頃であったろうか、私は医学部の学生時代に大阪の史野家を訪れたことがある。史野根生氏とは、その時以来の顔見知りの仲である。スポーツ医学は私の専門分野の1つであるが、膝の外科は専門ではない。しかし、史野氏の最近の活躍に注目し、大変うれしく思っていたことが、この本を読むきっかけを作ってくれたのである。

史野氏もこの本の「まえがき」に書いてあるように、1970年代に入ると膝の外科には関節鏡が導入されて、形態診断が飛躍的に進歩した。更に、関節内で損傷した靱帯や半月の治療過程が直視下に解明され、鏡視下手術へと発展を続けてきた。鏡視下手術は、関節周辺の組織に加わる損傷を最小限に抑えて、関節内の操作を可能にする。スポーツ外傷学が求める目的と一致したこともあって、スポーツ整形外科の中でも大きな位置を占めているのが関節鏡による診断と治療である。関節鏡の特性に興味を示し、試行錯誤を続けながら膝関節外科ひいてはスポーツ外傷学の発展に大きな役割をはたしてきたのが、史野氏を始めとした同年代の整形外科医である。

この本は200頁よりなり、9章から構成されている。その内容と執筆者は、1章：機能解剖(史野根生氏)、2章：靱帯損傷(史野根生氏)、3章：半月損傷(黒坂昌弘氏)、4章：膝蓋骨脱臼・亜脱臼(井上雅裕氏)、5章：骨軟骨傷害(安田和則氏)、6章：膝の過労性傷害(堀部秀二氏)、7章：年齢からみた膝関節傷害(古賀良生氏)、8章：リハビリテーション(小柳磨毅氏)、9章：予防(史野根生氏)である。

史野氏を含めた7名の執筆者は、昭和40年代後半から50年代前半に大学を卒業した整形外科医あるいは理学療法士である。それぞれが、自分の得意とする分野を受け持って執筆している。この本を読んで感じることは、単なる解説書とは少し趣きが異なることである。ある傷害についての概念、病態、治療法を説明するにしても、これまでの考え方の変遷と、現在到達している一般的な考え方に解説を加えるというのではない。執筆者自身が、実際に症例を経験することによって得ることができた、著者独自の考え方が明確に示されている。これまでの自分の研究をまとめて、それらを集大成した論文集といった趣きが感じられる解説書である。

膝の傷害の病態解明の最近の進歩を理解する上にも、またスポーツ医学的な考え方に基づく治療法を知る上にも、最適の本である。スポーツ医学に興味を持つ実地医家、それにスポーツ現場に関わっている指導者やトレーナー、理学療法士にとっても、絶好の解説書としておすすめしたい。

(B5 頁200 図115 写真174 原色図24 1995
定価9,785円(税込) ㊞400 医学書院刊)